世界の街角から

デンマーク王立美術アカデミー建築学校　在学中
鎌田貴子

古い良さを残しつつ現在に適合させる

これまで何回かにわたりアンマークにおけるシニアハウジング・身体障害者用の住居・建築物を取り上げ、何が彼らのか、なぜ違うのか、その背景について述べてきました。前回は、エコロジカルの考え方、ハードも重要な要素となり、もう一つのシーンとして例を取り上げてみたい思います。

ここコペンハーゲンはとても美しい街だとよく聞きます。特に、古い町並みがそのままに保存されています。第二次世界大戦時に爆撃されなかったこの街は、ヨーロッパ中心部でもスカンジナビアの人々からも「うらやましい」と言うほど、現在の暮らしに適合するように非常に神経が使われています。実際、この国にはそういった街があちこちにあります。少し街から外れたところに建つ修道院、車が無いからはっきりとは言えるが、バスを使う方、それぞれ自分の車に乗ってもらっています。と言う。当然の助け合い自然になされています。ここにその復旧工事見学に行くことになりました。

「静かで、こんな美しい自然に囲まれて、そしてこの美しい建物、世界アポンス所が今は再興になっていたりして、本当にユニークで住んでいてよかったなぁ。」

ちょっと福葉でみつけてください。日本でも民家再生などエコロジカルの点からも盛んに問われるようになりましたが、例えばスウェーデンなどの田舎住の一角などとそんな風に使われるようになったら楽しいと思いませんか？

慣れ親しんできた場所も新しい機能を持って再生し変わる

もう一つ、コペンハーゲンから車で渡り出いに二十分程行ったところにある、シニアハウジング（高齢者住宅）＋地域のシニアのアクティビティセンター（集会所）＋アクティビティセンターを含む、昔の貧民の住宅は古く、六〇年代に建てられた荘園が元になっているそうです。今の形の初になったのは、九、五年のこと。その中には他にも、カフェ、遠藤製陶器・服飾等の展示室・サロンがあり、シニアハウジングに住む方々だけでなく、その地区の新しいお年寄り集まってきます。いろいろな集まり・講演も続々広がられます。個人の所有だったこの館を市町村が買い取ってアクティビティセンターにしたのは一九八一年のこと。崩壊だった所に四一戸の住居が新しく建てられたのは一九九一年のことです。港を見渡すように建つ　この美しいセンターは公共の交通の便もよく、しかし適度な道路から離れ静に入っつて騒がに侵されることはありません。世界から慣れ親しんでみた所がこのように新しい機能を与えられ、新しい人々が入り交じっていることの、人の生き思わせます。

＊

社会はいろいろな人々の集まりです。若い人もいます。子供もいます。お年寄りもいます。身体が不自由な人もいます。そしてその中で、時が流れていきます。

いろいろな思いの出が作られていきます。思い出の詰った活動・街をもう一度見たい、生活にとっては、新しい出会いを求めて、そこに次の思い出が積み重なっていきます。そこにまた、そこに人々の例に目を向けて、そこに、もしあなたが使用者ならどういう家に、どういう社会にどう住みたいか考えてみてください。あなたが家・建物の供給者ならもう一度、住み手になって考えてみてください。

復旧工事見学に行くことになりました。

アクティビティセンター　昔の貧民の住宅

復旧工事見学に行くことになりました。

復旧工事見学に行くことになりました。

あなたは、どういう家に、そして、どんな社会に住みたいですか…。

単なる便利さの追求では本当の生活の質の向上にはならない

あなたが長年暮らしてきた家があります。いろいろな思い出が詰まった家です。ある日、ふと、「建物」が、ずっと、ずっと、ずっと、どうしてですか？

あなたは家がありました。

「相母さんが長年住んでいた家に、ずっと、ずっと、ずっと、どうしてですか？」

あなたは家がありました。

「相母さんが長年住んでいた家に、ずっと、ずっと、ずっと、どうしてですか？」

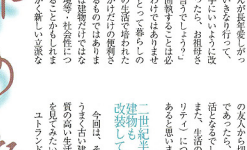
その家を壊すにいろいろ改装してまったったら、お相母さんはなんて言うでしょう？

古い物に固執することは必ずしもいいわけではありません。人にとって暮らしの場・今までの生活で培われたものは、見かけだけではなく、これは建物だけではなく、人間環境等・社会観についても言えることかもしれません。せっかく新しい立派な建物・世界アポンス所が今は、ずっと、ずっと、ずっと、どうしてですか？

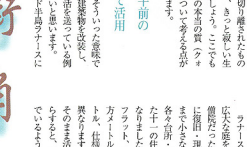
二世紀を超す間の改装して活用

今回は、そういった意味でうまく古い建物を改装し、質の高い生活を送っている例を見てみたいと思います。ユトランド半島ラナーズにある築二百五十年になる修道院。

ラナーズスィティホルドに飯む広大な庭を持つ、この三は尼僧院だった所。一九八〇年代に復旧・現代化が施され、今までかなる居住だった所が、各々自用・バスルームがついた十一の住居（フラット）になりました。一、三階のこのフラット、大きさも四十三・平方メートル、一四平方メートル、仕様も一つ一つひとつ全く異なります。窓や分厚い壁もそのまま活かされ、日本人から見ても、まるでお城と住んでいるようにも映ります。天井の高い大広間・地下室はそのまま残され、住人の交流の場になっています。



修道院の外観



修道院の玄関

修道院の玄関

修道院の玄関

グランド・興味を持った住人は、皆さん使用で自分のことは自分ができる人々で、半世紀にもなる歴史を世話してくれます。さまざまなグループ・ボランティアもいてくれます。ある